

2007年12月15日

ユニセフ＊コープ ネットワーク

ほむ・ほむ通信

No. **38**

フィリピン スタディツアー PHOTO REPORT

2007年11月11日(日)～11月17日(土)まで、フィリピンでのユニセフの支援活動を5生協が参加して、視察しました。2006年2月に発生したレイテ島南部の地滑り被害に対する復興支援や、マニラ等での子どもの保護の活動やアドボカシー活動について見ることができました。その時のようすを写真でご紹介します。



再建された学校

地滑りを引き起こした大雨により被災した村の近隣の村でも、地滑りの危険が高まりました。そのため、安全な場所に村ごと移動することになりました。移転した村に、ユニセフが新たな学校を建設するための支援を行いました。開校は2008年1月の予定です。



教材や学用品の提供

視察日は、学校に通う生徒全員に学用品セットが贈られました。ノートや鉛筆の他、サンダル、Tシャツ、歯ブラシなどが入っています。その他、村人へ貯水用のポリタンクも贈られました。校舎内の机やイス、教材もユニセフから提供されました。これらの支援は、日本からの緊急・復興募金が活用されたものです。



ストリートチルドレンのための センター（マニラ）

ユニセフが支援している Laura Vicuna Foundation(NGO)を訪問しました。ここでは、ストリートチルドレンが学校に行けるよう資金や学用品を提供したり、夜間の課外プログラムを提供しているほか、職業訓練を行い、就職し、自立できるよう支援も行っています。

左の写真は夜間プログラムに通っている子どもたちによる歌とダンス。
右の写真は、ビジネススキルを学ぶ職業訓練センターの授業のようすです。





**ストリートチルドレンのためのセンター
プエルト・ガレラ(ミンドロ島)**

ユニセフが支援している NGO、Stairway Foundationが運営するセンター。結核を患ったストリートチルドレンや刑務所に拘留されていた子どもたち、性暴力・性搾取の被害にあった子どもたちの成長を支援しています。自然環境やアートを取り入れたセラピーや公式・非公式の教育、職業訓練も提供しています。

写真は、子どもたちが寝泊りする寄宿所。



子どもの性的搾取の啓発活動

ユニセフが支援している、子どもの性的搾取の問題を啓発することを目的とした演劇「割れた鏡」の一場面。ラップ(歌)と3人の子どもたちの独白により、子どもの性的搾取や虐待、ストリートチルドレンの実態を生々しく伝えています。

問題に対する社会への理解を深め、被害者が、自分の心の中に問題を閉じ込めないで、周りに相談できるようにすることを目的としています。



ゴミ山で働く子どもたち(パヤタス)

マニラ郊外のケソン市にあるパヤタスは、ゴミ山に囲まれています。毎日何百台ものごみ収集車がごみを運びこんでいます。ここに住む子どもたちは、健康面でも安全面でも危険なゴミ山の中から、リサイクルできる品物を見つけ出し、売ることによって収入を得て、家族の生活を支えています。ゴミ山で働く子どもの数は約 3,000 人、1 日働いてほしい 100 ペソ(約 300 円)程の収入が得られます。



パヤタスの子どもたちへの非公式教育

ユニセフは、パヤタスでストリートチルドレンの社会復帰と教育を支援する活動を行っている NGO を支援しており、約 250 名が支援を受けています。子どもたちを学校に通えるよう奨学金を提供し、制服、くつ、かばん、タオルや、ワークブックなどの勉強道具の支援をしています。公式の学校に通えない子どものためには、非公式の教育を提供し、基礎的な知識を身につけ、大学に入学するための高校卒業資格を得られるよう支援しています。

♪ 視察参加者の感想 ♪



格差を感じた旅

フィリピン国内をあちこち移動しましたが、首都マニラと地方都市との間の大きな格差には驚きました。そして、必ずしも環境がいいとはいえない中で、こどもたちが喜んで学校に通い、勉強していることがとても印象的でした。ユニセフによる支援の大切さに気づくとともに、こどもたちが見せてくれた笑顔を忘れないでほしいと思いました。

ゴミ山に囲まれたコミュニティ

ごみ山の現状には驚愕しました。法が確立されずに、危険と隣り合わせの生活。そこで暮らす子ども達を受け入れている KNK（ユニセフが支援している NGO）の見学。子ども達が一生懸命勉強している様子や、パフォーマンスで歓迎してくれた姿は、貧困から抜け出し、家族を支えたいという思いが根底にあるからだと感じた。このような機会を与えられた子ども達は目標を見つけることができるが、まだまだ気づかないで運命だからと諦めている現状が多々ある。すべての子どもが愛する家族と共に暮らすことができ、年齢に相応しく成長し自立していきける社会になるよう、支援は必要だと思った。

再建された学校を見学して

地滑りとは聞いてもあまり想像がつかなかったが、自分が歩いてみてその大変さがわかった。木が根を張りにくいココナツであること。雨を含むと足を踏ん張ることさえ難しい土である。家の作りがどうこうという問題ではないことがよくわかった。素早い支援ができてどれ程の人々が助かったか・・・。又、予想以上の村人の歓迎ぶり。私たちの募金がこんなに役立っているのだと実感した。わずか 900 万円で学校が建つという現実、我が子に学ばせることができる喜びを親が痛感してくれている事。今後に向けて希望を膨らませる人々を前に、改めてこの活動の重要性を感じた。校長が給食や寮について計画を語っていたが、現実的な運営のプランが欠けていると思う。地に足のつかない理想論でなく、本当に実現するプランを立てられるようにサポートする必要性を感じた。

フィリピンの食事

食事はその国の歴史や風土を物語ると言われていますが、今日あるフィリピン料理は中国とスペインの影響が大きく、本来の郷土料理に東洋と西洋が取り入れて出来たと言われています。島や地方が違っても言葉も料理の味付けも実に様々ですが、大雑把に言うと、“辛くなくてマイルド” なのです。

主食は米で豊富な魚介類を中心とした料理が充実しています。酸味のきいたものやココナツの甘さ、味付けに欠かせないパティス（魚醤）が独特の風味を出します。汁気の多いおかずを皿に盛ったご飯の上にかけて、右手にスプーン、左手にフォークを鉛筆を握るよう持ち混ぜながら食べます。ナイフを使わないのは植民地時代の名残のようです。

人生のあらゆる節目にはその家の経済状態に関係なく隣近所を招いてのホームパーティーがあり、大皿の自慢料理がところ狭しとばかりに並びます。今、旅行者が食べているレストランの食事は、都会化されたフィリピン料理と言えるかもしれません。（浜崎睦子）



パティス（魚醤）

知りたい? 知っそこ。ユニセフ ～難民編～ PART 2

Q 難民、避難民への支援について 教えてください

難民を支援している国際機関には 国際難民高等弁務官事務所(UNHCR) 国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA) 国連世界食料計画(WFP) 国連人道問題調整事務所(OCHA) 国際移住機関(IOM) 赤十字国際委員会(ICRC) などがあります。

難民問題はその性質上、国家間の援助によってすべてが解決されるものではなく、これらの国際機関を通じたきめの細やかな支援が必要です。

UNHCRの援助活動

緊急支援 難民・避難民は、ほとんど何も持たず避難してきます

テント・毛布・水・食料・医療・生活用品を支給し最低限の生活が営めるように支援します。

中期的支援 故郷へ帰る日を望みながら厳しい避難生活がつづきます

自立の支えとなるような教育・職業訓練・心に傷を負った人達へのカウンセリングも行います。

恒久的解決に向けて 避難生活が終わるとき、ゼロからの生活再建が必要です

故郷に帰れること・避難先の国が受け入れてくれること・第三国が受け入れてくれることを支援します

日本UNHCR協会パンフより

ユニセフは政府・他の国連機関・NGOと協力しながら、すべての子どもが食物・健康・教育・アイデンティティを守ることに對する権利をもっていると信じ、難民・避難民を支援しています。

1. 政府が「国内避難民に関する指針」と「武力紛争における児童の関与に関する児童の権利に関する条約の選択議定書」を批准し、支持するように呼びかけます
2. 教育と他の基礎サービスへのアクセスを提供します
3. 避難しているコミュニティが所得を生み出せるように支援するプロジェクトを立ち上げます
4. 子どもの権利と保護の問題について理解と意欲を高めます
5. 子ども兵士の武装解除、軍隊からの撤退、社会再生のためのプログラムを実施します

ユニセフの緊急支援

緊急事態が起こって最初の2ヶ月ほどの間に、ユニセフは、他の国連機関やNGOと協力し、迅速に、次のような活動を優先しておこないます。ユニセフは、コペンハーゲンをはじめ、数ヶ所に物資拠点を整備しており、迅速に必要な支援物資を現地に届けます。テント、毛布、食糧、水など、生活に必要な物資や医薬品が届けられるほか、学校の再開に必要な教材なども早い段階から提供されます

☆ユニセフハウス2Fには 実際のテントと緊急物資・さまざまなキットが展示されています。

支援の事例 バングラデシュ

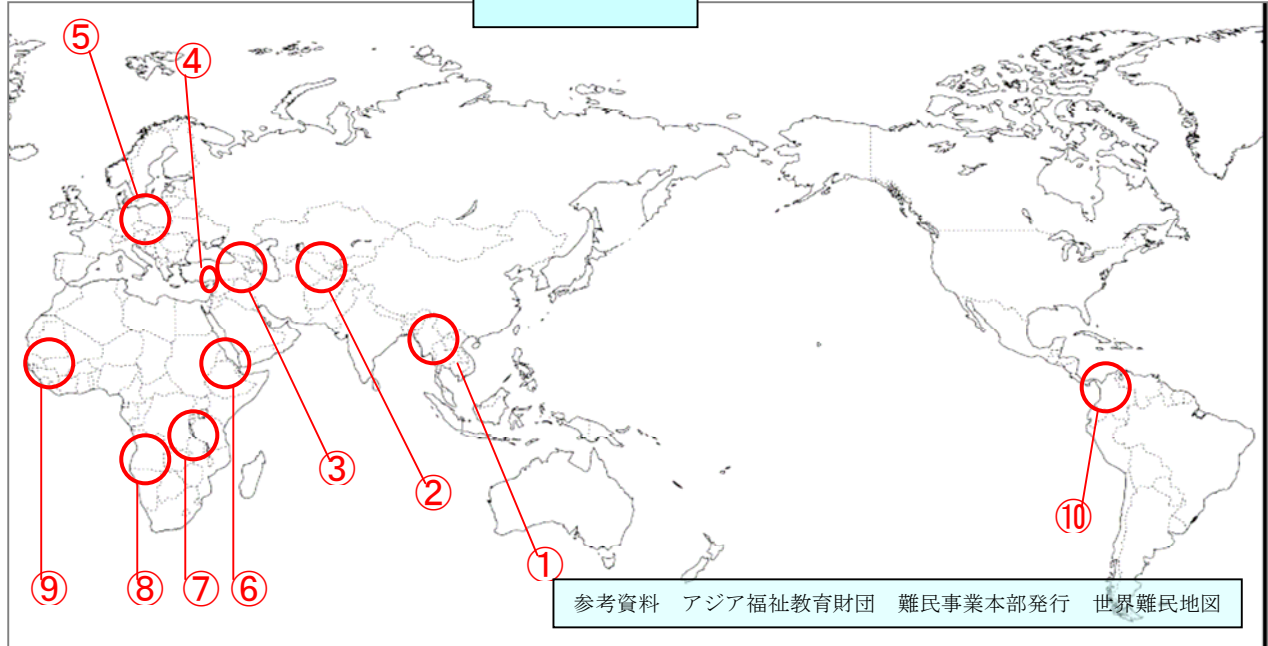
サイクロンで被災した子どもたちを支援する為にセーブ・ザ・チルドレン(NGO)と共同で、「子どもにやさしい空間」と呼ばれる子どものための避難所を27ヶ所設置。今後340ヶ所設置予定。この安全な「空間」は50～200人の子に對応。安全な水と食事を提供している。又ボランティアは、ユニセフが提供したレクリエーション・キットを使って心に傷を負った子どもを支援し、心の傷を癒す手助けをしている。

ユニセフHP 緊急支援情報より

☆ユニセフHPには 「世界のこどもたち」の項目に難民・避難民 緊急支援のストーリーがあります。ご覧ください

(山本直子)

世界難民地図



① ミャンマー

100 以上の少数民族からなる国。軍事政権との対立によって 民主化を求める組織や迫害を受ける少数民族が周りの国に逃れている。日本の受け入れている難民のなかでは、この国の人々がもっとも多い。

② アフガニスタン

79 年ソ連の軍事侵攻をきっかけに難民が流出した。90 年ピーク時は 600 万人以上。除々に帰還が進むが長引く内戦と大干ばつで再び多くの難民・避難民が流出した。

③ イラク

クルド人はトルコ・シリア・イラン・イラクに分布する民族であり、91 年の湾岸戦争後、イラク政府軍によるクルド人に対する鎮圧により多くの難民が流出した。

④ パレスチナ

48 年のイスラエル建国宣言に端を発する第一次中東戦争により、多くのパレスチナ人が土地をうばわれ、周辺諸国に逃れた。その後イスラエル政府は難民の帰還を認めておらず、半世紀以上問題は解決していない。

⑤ 旧ユーゴスラビア地域

90 年代初めから、各共和国が独立の動きをみせ、**クロアチア**と**ボスニア・ヘルツェゴビナ**独立の際の激しい紛争、**コソボ**紛争、**マケドニア**紛争などにより、多くの難民・避難民が発生した。帰還が進んでいるが、民族対立のために祖国に帰れない難民も多い。

⑥ アフリカの角地域

民族対立や国境をめぐる国家間の紛争、90 年代の干ばつにより多くの難民が流出。**エリトリア**と**スーダン**では北方のイスラム政権と南のキリスト教・アムニズムの対立による被害が多い

⑦ アフリカ大湖地域

ルワンダ・ブルンジ・コンゴ
ベルギーからの独立以後、フツ族・ツチ族の対立や政権の争いが大量虐殺や内戦の原因となり、多くの人が難民として周辺諸国に流出した。戦火は周辺諸国にも広がった。

⑧ 南アフリカ地域

独立による 民族紛争や政権争いで内戦が勃発。**アンゴラ**では東西冷戦崩壊に伴う大国の絡みやダイヤモンド資源の利権をめぐり内戦が長期化、地雷被害や飢餓の発生により、多くの難民・避難民が周辺諸国へ流出した。

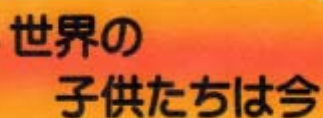
⑨ 西アフリカ地域

90 年代利権争い、民族的な緊張により内戦が頻繁に発生。特に**リベリア・シエラレオネ**では、外部からの資金・武器、利益によって大きな紛争に発展。99 年にはアフリカの難民・避難民の 3 分の 1 以上が西アフリカにいたといわれている。

⑩ コロンビア

1985 年以降、政府対左翼ゲリラ、左翼ゲリラ対パラミタリー（極右不正規民兵組織）の抗争が国内各地で頻発。さらに 90 年代初頭の大規模麻薬カルテルの消滅により、左翼ゲリラ及びパラミタリーが麻薬を資金源として勢力を拡大したため、紛争は激化。このため各紛争地域で危険にさらされている農民を中心とした人々は避難を強いられ、難民及び大量の国内避難民が発生している。

ぼむぼむ 37 号 表でお伝えした難民・避難民の多い国々を地図上で示し、状況を説明いたしました。これらは難民の一部であり、全てではありません。このほかにも、干ばつ、洪水、地震、サイクロンなどの自然災害で、家を失い不便な避難生活を余儀なくされている国民のいる国も多くあることを合わせてお伝えいたします。



(絵) 蛭沢素子



まず食料、医薬品、毛布、テントなど、生命・生活に直結するものを送ります。例えば、水キットには、貯水容器、ふたつきバケツ、せっけん、浄水剤が入っています。

あっちのテントで
学校が始まるよ!!
さあ! 元気を出して
先生も友達も
みんな待ってるよ!

被災後、比較的早い時期（約1週間後）に
どこでも学校が開けるキットや遊び道具
を送ります。学校に行くことは、子ども達
が日常生活を取り戻す意味でとても大事
なことです。

スクール・イン・ア・ボックス
箱の中には学用品や教材（先生1人分、生徒80人分）が入っています。



レクリエーションキット

レクリエーションキットは、緊急事態後の子ども達の心の傷を回復し、友達と安全な場所で遊べるようにするための、スポーツ道具や遊び道具をセットにしたものです。



「2007 ユニセフやまがたのつどい」が行われました。

山形県生協連主催による「ユニセフ/やまがたのつどい」が、11月1日(木)に、山形市のコープ桜田3階ホールで開催され、県内から62名が参加しました。

今回のつどいは、1・ユニセフの活動や世界の子どもの現実を知ろう、2・指定募金先の「ネパール」を身近にしよう、3・生協のユニセフ活動を知ろう、という3つのテーマをもってプログラムが組まれました。



まずビデオ「ユニセフ地球のともだち」を鑑賞したあと、日本ユニセフ協会から取り寄せた「地雷レプリカ」「発育観察グラフ」「水がめ」「スクールインアバッグ」について、協会の林田佳子さんから解説していただきました。そして、水道のない貧しい地域では、河川からの「水がめ運び」が大変ということを実感してもらうために、参加者から水がめ運び体験をしてもらいました。カゴに15kg分!の重石をいれましたが、運ぶどころか持ち上げるのも大変な重量に、その苦労を実感することができました。

引き続き林田さんからは、ネパール支援の現状について報告がありました。単なる物資支援ではなく、自立できるプログラムを支援していること、根深いカーストと女性差別が色濃く残るネパールにおいて女性の権利向上が進んできたことなどが報告され、指定募金が有意義に活用されていることがわかりました。

お昼にはネパール風カレーとネパール紅茶が振舞われ、その後ネパール出身のチャンダさんからお話をいただきました。チャンダさんも小さい頃は、水がめ運びをしていたことや、日本でもヒンズー教を守って牛・豚肉は食べない事など興味深いお話の後に、チャンダさんの指導で、ネパールの踊りをみんなで踊りました。チャンダさんいわくとっても簡単なレベルだそうです。参加者は四苦八苦しながら踊っていて、この日一番の盛り上がりとなりました。



最後に北海道・東北地連の斎藤浩輝氏から「生協のユニセフ活動」について、山形県連の友専務より「07年ユニセフ募金の取り組み」について報告・提案をいただき、つどいを終えました。



カードの即売展示コーナーをクリスマスムードに演出



コープえひめ

カード&ギフトの配布にあわせ、職場で展示即売を始めました。その場所だけ、クリスマスムードになっています。プチベアー・キーホルダーはとても人気があり、即完売しました。

指定募金先の「ラオスを知ろうよ!はじめてのいっぽ」イベントを開催

11月5日(月)横浜市技能文化会館にて、コープかながわユニセフ「人身売買から子どもたちを守る」ラオス指定募金先の国…ラオスを身近に知ってもらいイベントを開催しました。(参加者:22名ラオスの方、子ども連れの方の参加もありました)ラオスに本を普及するNGO「ラオスのこども」赤井朱子さんを講師に生活体験を語っていただき、楽しみながらラオスの文化に触れ、理解を深めました。



①自分の名前をラオスの文字で書いてみよう!

「う～ん。クネクネして難しい…」
ご夫婦で「ラオスに行ってみたいねえ」



②ラオスの生活を知ろう

「半年前まで子連れで(!)ラオスに行っていました」赤井さんに生活習慣や衣食住を教えてくださいました。ラオス織物は素朴な風合いが素敵で、古きよき日本の手仕事を思わせます。写真は巻きスカート。



ラオスの食…

ラオスの食生活は種類が豊富、というお話にはびっくりしました。中国文化の「米麺」「ごはん」フランス植民地のなごりの「コーヒー」や「フランスパン」、たくさんの野菜があり「おいしそう!!」

ラオスの教育…

義務教育は5年間。給食はなく休み時間には駄菓子屋さんが出現!なんと授業をしていた学校の先生が(副業で)駄菓子屋に大変身する場合も。都市では雑貨屋の一角で本が売られているが、学校で字を覚えても一般に本がないので文字を忘れてしまう…。赤井さんが活動するNGOではラオス語の本の出版をしています。

ラオスの住…

「ラオスならではの福祉」として、生活に困窮した子どもはお寺に預けられることも多いそうです。

参加者の感想より…

- 経済発展するとなくなるものも多いし、あのような風土と伝統はなくなるといいけど…。
- 今度はパンが食べてみたい、民族衣装がみたい、飲み物・仕事・宗教観などもっと知りたい。

③ラオスのごはんをたべてみよう

調理室では「コープかながわユニセフの会」のメンバーが中心となり、ラオスの軽食を準備していただきました。「ラオス式に、手でたべてみましょう…」抵抗があるかと思われたものの、参加者は「ラオス式」に指でもち米をほぐして「おいしい～!!」



ラオス軽食メニュー

「赤米入りもちごめ」
「辛みそ（生キャベツと）」
「ソーセージ」
「ココナッツゼリー」
最後にコンデンスミルクたっぷりの「ラオスコーヒー」



もち米は大人気！「1歳の娘も、もち米をおいしく食べました」

食事のあと（財）日本ユニセフ協会神奈川県支部作成の紙芝居「サワンの約束」を鑑賞。食や文化体験でより身近になったラオスの、人身売買の現実を考えさせられました。あわせて、平手理事よりコープかながわのユニセフ活動についての報告と紹介をしました。

ラオス人のスパターさん。
「本当に楽しかったです」



だまされてタイへ人身売買される姉妹の悲しいお話。故郷「サワンナゲート＝約束の地」に帰りたいけど帰れない…ラオスの抱える現状を知りました。



「参加してとってもよかった」「ぜひ次回は友達を誘って参加したい」「ラオスは気になる国なので参加してみた」という参加者から、次回は「料理教室をしたい」「参加者どうして交流したい」「ラオスをもっと知りたい」「ラオスと一緒にいきたい」と、たくさんのアイデアをいただきました。今後も指定募金先のラオスを楽しく身近に学ぶ機会を、県内各地にひろげていきます。

ユニセフ「ハンド・イン・ハンド」街頭募金に取り組みました

～10月20日秋田駅で 募金額約4万円～

秋田県生活協同組合連合会は、各生協に呼びかけて、毎年ユニセフ街頭募金活動「ハンド・イン・ハンド」を実施しています。今年は10月20日(土)に秋田駅ぽろーどで、4生協からの27名(子ども3名)で取り組みました。

当日は、朝から雨模様というあいにくの天気でしたが、「食の国あきた県民フェスティバル」が駅前広場(アゴラ広場)で開催されていたこともあり、悪天候の割には人出が多かったようです。しかし、他に3つの募金の呼び掛けが行われていたため、通行する人も募金を避けて通る姿も見受けられました。

ぽろーどの東西で2グループに分かれて懸命に募金を呼びかけた結果、昨年(約6万円)には及びませんでしたが、2時間足らずで40,161円の温かい募金をいただきました。ありがとうございます。

終了後の反省会では、自分たちグループの募金に協力してくださった人が一目でわかるように、募金をいただいた人に手作りのワッペンを付けていただくという提案がありました。そうすれば同じ人に何度もお願いすることなく「ありがとうございました」のお礼を言えるし、いやな気分になさることなく声を掛けやすくなるということで、来年から検討することにしました。

なお、この募金は、他のユニセフ募金とあわせて、日本ユニセフ協会にお渡しします。秋田県内の生協は共同購入や店舗で、ユニセフ募金に通年取り組んでいます。



平安女学院生協

割り箸から始めるユニセフ募金活動



平安女学院生協では、生協に割り箸やスプーンを買いに来る学生が多くいました。そこで、そういった学生から「代金としての5円はユニセフに募金してもらおう」ということで取り組みを始めました。その他にもレジ横に募金箱を設置し、昨年1年間で、割り箸・スプーンによる募金と合わせて5961円をユニセフに募金することができました。多くの店舗では無料で割り箸やスプーンを渡していると思いますが、そこにちょっと目を向けてできることを考えてみるのもいいかもしれませんね。

(「makers.」2007年5月31日(木)号より)

「makers.」: 全国大学生協連では、災害・ユニセフ・ボランティア情報新聞「makers.」を発行し、会員生協の「ユニセフ活動」などを紹介しています。



TOPICS

ユニセフシンポジウム報告 子どもの権利条約採択満18年記念

「取り残される子どもたち」

～世界の子どもたちが背負う、私たちの問題～

2007年11月19日（月）に開催されたシンポジウムでは、高校生や大学生を含む大勢の参加があり、1100名収容できる有楽町のよみうりホールがほぼ満席となりました。その中での報告やパネリストの方々の熱い討論の模様をご報告します。



第一部：基調講演『ミレニアム開発目標の達成に残された課題』

ークル・ゴータム ユニセフ事務局次長

子どもの権利は、2000年のミレニアム開発目標の中心にあります。実際、子どもたちへの投資や基金が増加し、現在は今までで一番子どもの権利が守られていると言えます。しかし、世界では未だに貧困と不平等、HIV/エイズや紛争が蔓延しています。国家間だけでなく、国内でも人々の間で貧富の差が拡大しています。これを抑えるためには、何よりも国際的な協力が必要です。ユニセフは、子どもの権利を守ることが世界の平和と発展を達成するために一番大切だと信じています。

第二部：基調報告『インド・ムンバイ スラム地域視察報告』ーアグネス・チャン 日本ユニセフ協会大使

私はムンバイへ視察に行き、私がおもっていたインドのイメージとのギャップに驚かされました。インドには約4億2千万人の子どもがいますが、その35%しか出生登録されていません。つまり病院では生まれていない。小学校を卒業できるのは4人に1人。半数は栄養不良。50～70%はスラムに住んでいます。私は毎日スラムを歩き、そこで友達ができました。14歳のチャンダン、学校に行きたくても行けません。お母さんが亡くなり、兄弟とHIV/エイズを患うお父さんを支えるために日々車を洗って稼いでいます。11歳のリンクは、お父さんが亡くなり、一人で街に来て、目の不自由な老人とハンセン病を患う男性、足の不自由な男性と共に路上で生活しています。14歳の少女プジャは、父親の暴力で母親が家を出て、自分も学校をやめさせられました。このような子どもたちは本当にたくさんいるのです。日本人には実感が持ちにくいけれども、取り残された子どもたちがいることを忘れないでほしいのです。

第三部：パネルディスカッション

報告に続いて行われたパネルディスカッションでは、6人のパネリストから次のような意見が出されました。

▶**子どもの権利専門家・ARC代表 平野裕二氏** 子どもの権利条約は、子どもの世界的な問題について認識が強まったという点で非常に意味があると思います。ただ、子どもの問題に取り組むとき、この権利条約を柱として考えること、子どもの声を聞くことがあまりにもありません。これからの一番の課題は、子どもたちの参加、もっと子どもたちの意見を聞くということです。

▶**(財)日本ユニセフ協会副会長 東郷良尚氏** グローバリゼーションは、貧富の差を拡大させました。まず、1950年代から80年代の大きな経済の流れによって、グローバル化は欧米や日本の間だけで起こり、開発途上国は置き去りにされました。また、一国内でも経済格差が拡大し、国内で取り残された子どもたちが出てきました。日本が大切にすべきことは、やはり教育です。子どもと一緒に、世界の問題を考えていく必要があります。

▶**ユニセフ事務局次長 クル・ゴータム氏** 人権の侵害とは、貧困です。資源がないというのは、貧困の理由ではありません。国がいくら軍事費に使っているのでしょうか。社会が何を優先するかということです。また、私たちは子どもたちの想像力と創造性を過小評価しがちです。もっと若者を信頼して、参加する機会を与えることによって世界は変わっていくはずです。日本は、世界の子どものために非常に貢献をしていますが、もっとその知識を広めるための対話が必要です。また、政府や民間の投資が世界の子どもたちにどれだけ使われているかという情報の発信が重要です。

▶**俳優・作家 高見のつぼ氏** 子どもを守るために条約が必要な世の中になったというのは、ある意味悲しいことです。しかし、現実から目をそらさず、「大きい人」は「小さい人」に世界の状況を伝え、自分たちのしていることについて意見を求めていく責任があるのではないのでしょうか。

▶**2006年J8サミット参加者の子ども代表、銭亀さん** 日本の子どもたちはもっと世界の問題に目を向ける必要があると思います。例えば、国際協力NGOでも、「子ども」という言葉がほとんど使われていません。子どもが未来をつくっていくのだから、もっと意見を言うべきだと思います。

▶**大久保さん** 日本社会は、何らかの問題を抱えた子どもたちにとっても冷たいと思います。大人はもっと子どもの内側に踏み込んでほしいです。日本の国際支援については、もっと現状を国民に伝えて、国民の意思をしっかりと反映したものにする必要があると思います。また、学校やJ8のような場で、もっと世界の状況について学生が討論する機会を与えてほしいと思っています。

▶詳しくは http://www.unicef.or.jp/library/report/sek_rep47.html をご覧ください。(日本ユニセフ協会インターン 三上)

バングラデシュ・サイクロン緊急募金

2007 年 11 月 15 日夜、バングラデシュ沿岸部を襲ったサイクロン「シドル」は、過去 10 数年来で最大規模のものでした。被災者は 850 万人、その半数が子どもだと言われています。ユニセフは被害状況の調査を行った上で、水と衛生、栄養、保健、子どもの保護、物資供給などの分野で緊急・復興支援を行いました。現在までに、家族キット(日用品 6 万セット)、衣服(6 万着)、食器、バケツ、石鹸、毛布(10 万枚)、ビニルシート(3 万枚)、防水シート(3 万枚)、貯水容器(11 万個)、浄水剤(730 万錠)、移動式浄水施設、井戸、トイレ建設資材、医薬品、経口補水塩などが配布されました。



「子どもにやさしい空間」が 380ヶ所に設置され、子ども達が遊び友達を作って日常を取り戻す手助けをし、虐待や暴力、搾取などから守っています。

©UNICEF/HQ07-1851/Shehzad Noorani



本やクレヨン、ゲーム、楽器、スポーツ用具などが入ったレクリエーション・キット(1,900 個)を配布し、心に傷を負った子どもを支援し、心の傷を癒す手助けをしています。

© UNICEF/2007/Noorani



「子どもにやさしい空間」では、ボランティアが被災した子どもたちに食料を提供しました。また、5 歳未満の子ども 33 万 8,000 人と、12 万 3,500 人の妊娠/授乳中の女性を対象として、栄養価の高い BP5 という高カロリービスケット(92 トン)や混合食、ビタミン A カプセルを提供しました。

© UNICEF Bangladesh/2007

▶詳しくは<http://www.unicef.or.jp/kinkyu/bangladesh/2007.htm>をご覧ください。 (日本ユニセフ協会インターン 三上)

(全体レイアウト 尾澤結花)

ぽむぽむ広場

☆ぽむぽむ通信の通算 38 号をお届けします。全国のユニセフ協力活動の交流誌としての役割はもちろん、世界の国々や子どもたちの様子も積極的に紹介していきます。また、各地の活動の参考になるような取り組みのご案内も行っています。

☆全国の活動事例や、ぽむぽむ通信の感想・ご意見をぜひお寄せください。

☆次号は、3 月 15 日発行です。お楽しみに！

ユニセフ*コープネットワーク

ぽむ・ぽむ通信

No.38 2007 年 12 月 15 日発行

編集 グループ ぽむ・ぽむ

スタッフ・編集/尾澤・谷杉・浜崎・福本・藤森・
松本・山本・林田・高井

イラスト/蛭沢

発行 日本生協連 組合員活動部

〒150-8913

東京都渋谷区渋谷 3-29-8 コーププラザ 11F

TEL03-5778-8124 FAX03-5778-8125

ホームページ <http://www.jccu.coop/>